



韓国に吹く日本食熱風

“イラッシャイマセ!”

居酒屋“酒恋し”に入った瞬間、お客さんを歓迎する店員の大きな声。席に案内されると、簡単なツキダシが出てきて、すかさず生ビールを注文。店の壁には、キモノを着た日本人女性の絵を背景にする日本酒の宣伝が貼り付けられている。

ここは東京の新宿や新橋ではなく、ソウルの江南（カンナム）区の繁華街にある日本式居酒屋です。テーブルに置かれたメニューには、“ブタ・シヨガヤキ、クシヤキ・モリアワセ、ナット・マグロ、タコ・ワサビ...”などの料理名が日本語のままハングル文字で羅列されています。やがて注文した生ビールがやってきて、共に座った同僚らと“乾杯”を叫んで飲みました。ただ、“乾杯”の発音は韓国語の「コンベ」です。

ソウルには日本式居酒屋が如何に多いかを、ソウルの代表的な繁華街である江南駅を中心に一度調査してみました。江南駅は以前に特許庁があった所で、周辺には特許事務所が多いです。江南地区の中心を通る江南大路とテヘラン路の交差点に位置した江南駅には南西方向に44階建てのサムソン電子本社の建物が建っています。

江南駅の北東地域は、周辺の会社員や若者たちが食事と酒を楽しむ歓楽街として有名です。江南駅を中心に概略150メートルの正方形地域にどの程度の日本式居酒屋があるのかを、韓国の代表的インターネットポータルサービスのネイバー（www.naver.com）のストリートビューを利用して調べてみたところ、その数は焼肉屋やビアホールをはるかに



超越していました。すべて、日本人観光客が対象ではなく、韓国人の会社員と学生を対象にする所であることは明らかでした。居酒屋の名前として、IZAKAYA、銀座屋、かつら、鳥まる、酒恋し、ともだち、上野御苑、勝負などがありました。

一番目の写真は、この地区の居酒屋中、実際に行ってみた“酒恋し”で撮影したものです。

別の日に、昔の同僚と久しぶりに会うことになりました。場所はソウルでもファッションナブルな人が集まる狎鷗亭洞（アックジョンドン）でした。昔の同僚が予約したレストランは、他でもない日本式居酒屋の“毬藻”という所でした。

最近の韓国では、同僚や過去の友人と会って虚心坦懐に話せる場所として日本式居酒屋がよく選択されるようになってきました。わずか過去3 - 4年の間におきたブームです。以前は、友人と会うのは焼肉屋でなければ刺身料理屋でした。

“毬藻”でシメサバと長崎チャンポンを食べましたがその味が絶品でした。シメサバは日本だけで食べることができるものと思っていましたが、その居酒屋では日本で食べたシメサバの味そのままでした。後ほど分かりましたが、“毬藻”は味が良いとしてインターネットの掲示板に良いレビューが多く上がっている所でした。

この頃のソウルの日本食は味もすばらしいです。昔から、韓国に日本食文化はありました。しかし、東京に住むようになって知りましたが、日本のものとは味が若干違いました。だが、今日流行している韓国の日本食は昔の韓国の日本食と違います。本当に日本の味に近いです。

居酒屋だけではありません。

久しぶりに訪ねて行ったサムソンドン・コエックス・モールは、COEXビルを中心に広がる地下道網に商店が密集し、多くの若者が集まる所です。そこで、一つのレストランの前にお客さんが長く列をつくっているのを見て少々驚きました。どうみても、その日のコエックス・モールで最も長い行列でした。

そのレストランは日本式のどんぶり屋でした。店の名前も“どんぶり”でした。いくらおいしくてもなかなか列を成してまで待とうとしないのが韓国人気質ですが、そのどんぶり屋には日本の超人気ラーメン屋のように長い列ができていました。二番目の写真はこのどんぶり屋の写真です。

ソウルの外も見てください。

韓国には高速鉄道KTXがあり、最近でもいくつかの新駅ができています。そのうち、昨年10月にできた蔚山（ウルサン）駅に行く機会が最近ありました。

この駅はできた直後から常に多くの利用客で賑わっています。そこに唯一の駅舎内食堂としてあるのが“木曾屋”という名前の日本



式レストランです。メニューは鍋焼きうどん、トンカツ、おにぎり、いなりずし、ラーメンなどの正統日本食ばかりです。もちろん“キムチ鍋焼きうどん”、“キムチ・トンカツ”のような韓国風日本食メニューもあります。

2回ここで食事をしましたが、常にお客さんで大賑わいでした。新しくできた駅舎内に唯一ある食堂が正統日本食レストランとはおかしなことですが、現代韓国人には普通に受け入れられているようです。

韓国に日本食熱風が吹いているのは、韓国人にとって日本文化が親しくなっている証拠でしょう。10年位前に日本で韓国食ブームがあり、今は韓国で日本食ブームの熱風が吹いています。両国間の食文化も距離が近くなって、互いに“近くて遠い国”とはもはや言えないと思います。

筆者紹介

金 成鎬（きむ そんほ）

韓国弁理士。1997年に韓国弁理士資格取得。
2000年、GIP特許法律事務所をソウルにて創業、2004年には、グローバル・アイビー東京特許業務法人に入所。両事務所のパートナーを務める。主に日本企業の韓国国内の出願業務及び韓国企業の韓国国内外の出願業務を担当。